

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「イオンと兵庫県が協力協定」
- 2) 「イオン、“寿司の出前” 始めます」
- 3) 「塩尻市、渋谷にワインバー」
- 4) 「市民農園“シェア畑”、埼玉・川越に」

1) 「イオンと兵庫県が協力協定」

イオンと兵庫県は2月15日、連携と協力に関する協定を締結した。

相互に緊密に連携することで、双方の資源を有効に活用した協働による活動を推進し、兵庫県内の一層の地域の活性化や県民サービスの向上に取り組む。

電子マネー「WAON」の活用や、子育て支援、災害対策、地産地消の推進や兵庫県産品の販路拡大、高齢者・障害者の支援などについて両者で協力し、さまざまな取り組みを進める。

取り組みの第1弾として、「兵庫コウノトリWAON」を16日から発行する。

このカードがイオンの店舗のほか、ファミリーマートやマクドナルド、吉野家、ビックカメラなど全国134,000か所のWAON加盟店で利用した金額の一部を、コウノトリが生息する自然を保護する活動に役立てる。

協定締結を記念して、4月に兵庫県産品フェアを近畿エリアのイオンや兵庫県内のマックスバリュ、KOHYO（光洋）など約170店で開催する。

大手企業と地方自治体の協力や提携企画が生まれている。東北地方が復興支援の一部として多いように思えるが、商品開発などを含めると他府県も事例が多い。地域復興が大きな流通に乗ることは大きな目的の一つだ。成果を上げて事例が増えれば良いと思う。

2) 「イオン、“寿司の出前” 始めます」

イオンは17日、できたて寿司の出前サービスを18日から、東京都と千葉県の10店舗で始めると発表した。回収式の寿司桶入りもメニューに加えて高級感を演出、卒入学式シーズンを前に、ハレの日需要を取り込む狙いがある。

メニューはマグロやサーモンなど10種類のネタを組み合わせた盛り合わせを、1人前から受け付ける。人気のマグロやサーモンなどは1貫から注文可能。ネットスーパーのシステムを活用し、指定日の3日前の午後3時までに注文を受け付け、指定時間に合わせて店舗で握る。

これまでスーパーの寿司は、寿司桶などがなかったことから高級感に欠け、ハレの日需要を取り込めていなかった。同社は2012年度中に、同サービスを都市部を中心とした全国100店舗以上に拡大する。

寿司の配達は、鮮度の問題がかなり大きく、お客さんが受け取り時間にいないといった場合のロスが大きそうだ。

ただ、上手く軌道に乗ると食材購入のついでにと、気軽に注文出来そうなので、寿司がより身近になるかもしれない。

寿司のデリバリー企業の対抗策や、消費者の反応が気になる取り組みだ。

3) 「塩尻市、渋谷にワインバー」

長野県塩尻市は6月にも、東京・渋谷に常設型アンテナショップを初めて開設する。

ワインバーは民間とのコラボレーションによるもので、バーに置く全銘柄の7割は塩尻産。料理にもレタスやみそなど塩尻産の食材を使う。昼は木曾漆器や農産物など地元特産品を扱うショップとなる。地元の団体や市のイベントの場としても活用する。

バーには市内8ワイナリーの200-300銘柄のワインを置く予定で、店名にも「塩尻」を入れてもらうという。店舗は代々木公園の西側の4階建てビルの1階で、広さは約60平方メートル。ビルのオーナーがバーを開設し、経営する。市は、賃貸料として新年度予算案に地域ブランド発信事業として320万円を計上した。市によると、市レベルの自治体によるワインバー開設は全国的にも珍しいという。市ブランド推進室の赤羽誠治室長は「ワインと特産物を一緒にPRし、首都圏の人に塩尻を知ってもらい、こちらに足を運んでもらいたい」と話している。

以前はアンテナショップというとおみやげ物屋さんのイメージがあったが、最近はどんどん多様化してきている。「B級グルメ」ブームや「ケンミンショー」といった番組によって、自分たちの当たり前が他県の人にとってはもの珍しいという“新たな発見”も影響しているのではないかと。アピールして消費活動を生み出すことが地域の絆をより深め、良いスパイラルが生まれそうだ。

4) 「市民農園“シェア畑”、埼玉・川越に」

アグリメディアは2012年3月、新しいスタイルの市民農園「シェア畑」の1号畑を埼玉県川越市に開設する。

「シェア畑」は、家庭菜園や農業に興味のある都市生活者と、担い手不足の農家をマッチングするためにはじめられたもので、利用者は、専用の区画に月ぎめの利用料を支払えば、年間20品種の野菜を自ら育てて収穫できる。また、プロの農家や菜園アドバイザーの指導・サポート付きで、周辺には駐車場、水道、バーベキューセット、農具など設備が充実しており、週1回程度、1回2-3時間の来園で、平日に仕事をしながら野菜作りが楽しめる。利用者間のみにとどまらず、土とふれあう経験、農作物が育つ様子、農家の苦勞、旬のおいしい農産物なども利用者同士で「シェア」することも可能。1号農園に続き、4月には横浜市内に2号農園の開設も予定されている。利用料は、月額4600円から。

農地レンタルは少しずつ増えてきているが、ビルの屋上ではなく本格的な農地でプロのアドバイスを得ながら農作物を育てられると、週1回とは言えよりリアルな農業体験ができると

思う。日本の未来を考えると「担い手不足にはレンタルを・・・」という考えがいつまで通用するかわからないが、まずは興味を持つことが大切だろう。